

2015年度「頭脳循環プログラム」ブリュッセル・ワークショップ

日本研究の新たな可能性を求めて Part 2

日時：2015年10月10日（土）9:30～17:00

2015年10月11日（日）9:30～15:35

場所：神戸大学 ブリュッセル・オフィス

2015年10月10日（土）

09:30～09:40 開会の辞：増本浩子（神戸大学人文学研究科長）

第一部「見立て」論の新展望

09:40～10:40

① 浦野剛史（神戸大学大学院人文学研究科研究員）

Shibusawa Tatsuhiko's Pliny : On a pagan model of how to write a natural history

澁澤龍彦のプリニウス—無神論者の世界観について—

コメンテーター：増本浩子

10:40～11:40

② Jennifer Guest（オックスフォード大学准教授）

From the Pillow Book to topical encyclopedias: textual memory in the Heian court

『枕草子』と類書——平安朝廷の文学と記憶——

コメンテーター：福長 進（神戸大学教授）

11:40～12:40 昼食・休憩

12:40～13:40

③ 市澤 哲（神戸大学教授）

『冥土蘇生記』——「異界」の幻視——

コメンテーター：福長 進

13 : 40~14 : 40

④ 嘉指信雄 (神戸大学教授)

白隠における「見立てと介入」—「作為」論の脱構築に向けて—

コメンテーター：市澤 哲

14 : 40~15 : 00 休憩

15 : 00~16 : 00

⑤ Marcella Mariotti (ヴェネツィア大学准教授)

被爆体験の表象と記憶の共有化—『はだしのゲン』の世界—

コメンテーター：Linda Flores (オックスフォード大学准教授)

16 : 00~17 : 00

⑥ Toshio Miyake (ヴェネツィア大学准教授)

Methodological nationalism in Japanese Studies and Social Sciences

コメンテーター：嘉指信雄 (神戸大学教授)

2015年10月11日(日)

第二部 日本語教育の新たな方法的試み

09 : 30~10 : 30

⑦ 大杉奈穂 (神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程)

Literary Works as Japanese Teaching Materials

日本語教材としての文学作品

コメンテーター：杉原早紀 (ハンブルク大学講師)

第三部 日本語研究の現在

10 : 30~11 : 30

⑧ 田中真一 (神戸大学准教授)

Loanword adaptation in Italian and Japanese: from the perspective of *Mitate*

イタリア語・日本語における借用語の受入れ—「見立て」の観点から

コメンテーター：鈴木義和 (神戸大学教授)

11 : 30~12 : 30

⑨ Bjarke Frellesvig (オックスフォード大学教授)

Corpora and the grammar of Old Japanese

コメンテーター : 松本 曜 (神戸大学教授)

12 : 30~14 : 30 昼食・休憩

14 : 30~15 : 30 総括 司会 : 實平雅夫 (神戸大学教授)

15 : 30~15 : 35 閉会の辞 : 福長 進

発表要旨・趣旨

①

晩年の澁澤が中心的な題材としたプリニウス『博物誌』について、その受容の歴史に注目して検討する。科学的な価値観からは誤謬の集成としてうち捨てられ、現在のイタリアでもあまり読まれることのないというこの本になぜ澁澤は目を付けたのか。日本におけるプリニウスの翻訳者である中野里美氏、英語圏で最も広く受け入れられているという H. N. ウェザーレッドの解説書の記述、そして現代イタリアの『博物誌』のイタロ・カルヴィーノによる解説など、時代や国籍の違うさまざまな評価を比較し、まずはプリニウスの受容において宗教的な問題があることを確認する。現代的・科学的な視点からは荒唐無稽というほかはない『博物誌』の記述を幻想文学として楽しむ、というのが澁澤龍彦『私のプリニウス』に記された表向き理由であり、それが題材の面においては中心的なものであることは疑いない。しかし、『博物誌』の受容の歴史の中でプリニウスが無神論者として批判されているという事実をふまえたとき、神の存在を否定し、迷信をできるかぎり切り捨てて世界を把握しようとしていたプリニウスは、サドの翻訳者として世に出た澁澤にとって、そのサドに通底する価値観を持った存在であったという可能性がある。これらを前提とし、プリニウスを主人公とした澁澤の作品「火山に死す」（『唐草物語』所収）の「自然のヴェール」に関する記述、また、『私のプリニウス』の「近代の通弊」という言葉、そして「あとがき」での「できれば私もこんな死に方をしたいと夢想したことがある」という澁澤の言葉について検討し、信仰やイデオロギーを排して徹底的に自分自身を中心として思考するというその態度が、澁澤がプリニウスという人物を評価・把握するにあたって重要な要素の一つであったことを確認する。

②

This paper will use scenes of poetic recitation and other feats of memory in the *Pillow Book* of Sei Shōnagon (c.1000CE) as a starting point for exploring the role of textual memory in Heian literary culture. *Pillow Book* anecdotes about spontaneous poem-chanting in social contexts reflect complex links between memory and oral performance, as well as highlighting the place of Chinese-style *kanshi* poetry in a shared memorization canon. These issues come into even sharper focus when the *Pillow Book* is considered alongside systematic large-scale encyclopedias and anthologies meant to supplement or promote memorization, like the *Wakan Rōeishū* (Japanese and Chinese-style Chanting Collection, early 11th century), and *Kuchizusami* (Recitations, 970; an encyclopedic children's primer meant for chanting aloud). Through a discussion of these texts, I will consider what the social values associated with memory suggest about the transmission of Chinese-style literary sources in the Heian cou

⑤

戦後 70 年を迎え、被爆者の高齢化により、個人の被爆体験が風化の危機にさらされている。どのようにしてそれを次世代に伝えていくか、それが喫緊の課題となっている。しかし、この課題は、言うは易く行うは難し、なぜならば、以下に述べるような、かたちなきものにかたちを与える営み、すなわち型取ることの懐孕する問題系を浮き彫りにするとともに、かたちを与えられたものが「集団」の論理に緊縛されて「集団」の括りのなかに自閉してしまうからである。

個々人の被爆体験を様々な媒体によってかたちにし、それらが交響と反響を繰り返して「集団」の記憶として成員の心に刻印されていくその過程で、原体験から紡ぎ出され、ひとつのかたちを与えられた体験は、もはや原体験そのものではなく、混沌とした原体験に理路が付与される。「集団」のなかに記憶として定着するとき、その「集団」が過去に遭遇した同種の積堆する出来事に準じて記憶化される。「集団」固有の記憶化の型が想定される。その型に規定されて、その型に収まりきらない、かたちにしようとすれば、くずれてしまうような原体験は、なかったこととして処理されることになる。

しかし、瞬時に広島・長崎の市街地が廃墟と化したその破壊力と、70 年の星霜を経た今現在も、放射能によって身体をむしばまれ、世代を超えて病苦との戦いを余儀なくされている、その禍根の時間的射程の大きさの点で、過去に比類のない戦禍であり、記憶化の型が機能し得ない、すなわち語ろうにも語ることをできない、想像を絶する惨劇であった。被爆の現実に対峙し得ない我々の経験知がいかに貧弱で無力であることか、痛覚させられるのである。我々は、語り得ないものを語るという難題にどのように立ち向かうのか。よほどの力業が必要になってくるであろう。語り手の異能、語りの持つ根源的な力に依存する他はないとすれば、何をどのように語り得たのか、あるいは何をかたり得なかったのかを検証する作業を踏まえて、「語りの力」について考えることになろう。

さらに、かたちにされた原体験は、伝承される度ごとに当座の論理とのせめぎ合いのなかで変容を蒙ることになる。また、その記憶が、「集団」を越えて共有化されようとするとき、他の集団の論理とのせめぎ合いが待ち受けている。こうして被爆者の体験を大きな括り、たとえば人類の記憶として共有するときには、その体験は幾重にも変容を蒙り、その都度多様な物語が産出されることになる。と同時に詐術が張り巡らされていく。表象された被爆体験、共有化された記憶に内在する複層する論理のせめぎ合いも重要な論点になろう。

⑦

本報告では、日本語教材としての文学作品について扱う。近年、コミュニケーション能力重視の風潮により、文法訳読法は時代遅れの教授法の代表と見なされている。そのため、文法訳読法で主に教材として用いられてきた文学作品は軽んじられるよう

になった。しかし、あまりにコミュニカティブになりすぎた授業の反動から、主に英語教育の場において、教材としての文学作品の利用が見直されている。他方、日本語教育に目を向けると、文学作品の使用についてはほとんど議論されておらず、また、文学作品を用いた日本語の授業の実践報告例も数少ないのが現状である。本報告は、ハンブルク大学日本学科で *Lektüre* の授業を履修した学生を対象に行ったアンケート結果から、文学作品の使用は書く意外の能力や文化的気づきを向上させるといった利点を有していることを提示し、今後日本語教育の場において文学作品が教材として取り入れられるべきであることを述べる。また、文学作品を日本語の授業に取り入れる際の問題点として、作品選定の明確な基準が確立されていないことが挙げられるが、報告者は作品選定の基準を提示し、日本語教育における文学作品の導入の基盤作りを試みる。

⑧

本発表では、おもに英語からイタリア語および日本語に入った、新しいタイプの借用語の分析を通して、伊日両言語における受入法則の異同を分析し、その言語学的意味を考察する。新しいタイプの借用語とは、語基 (base) と接辞 (affix) とが異なる言語の組み合わせによるもの、たとえば、英語の語基にイタリア語の活用語尾が組み合わさりイタリア語になったもの (google + are (イタリア語動詞活用語尾) → googlare) や、英語語基に日本語の活用語尾が組み合わさり日本語化したもの (google + ru : guguru (ググる)) などを指す。これらの合成語は、音韻・形態・意味それぞれの面において特徴的な振る舞いを見せる。しかしながら、その詳細な分析、さらには言語間の異同 (たとえば、上記の 'googlare' と「ググる」との異同) については、あまり論じられていない。

本発表ではこのような点に着目し、他言語から自言語に単語を借用する際の「見立て」的側面について報告する。

イタリア語については、外来語辞典 (*Le Palore Straniere : Garzanti (2003)*) および、文献、新聞、雑誌、広告等のイタリア現地で収集したデータを基本資料とし、日本語については、新語辞典や『現代用語の基礎知識』等を資料とする。分析を通して、音韻的には、伊日両言語とも、自言語に基づいた母音と子音の調整、すなわち、リズムの調整を行っていることを指摘するとともに、形態的にも言語を超えた共通性が見られること、さらに、意味的には、借用元である英語単語の表す複数の意味のうち、特定の部分が選択されるという面で共通性が見られることを指摘する。それと同時に、借用側の二言語における異なる面を指摘し、それらの意味するところを総合的に考察する。

さらには、上記以外の借用語受け入れ例についても検討し、報告する。